

北海道室蘭市立白蘭小学校 学校便り

白蘭

令和2年12月 7日 12月号① No17



ホームページは、「白蘭小学校」で検索するとすぐ見つかります。

【学校教育目標】

- ・深く学ぶ子
- ・心豊かな子
- ・健康な子
- ・未来をつくる子

努力する喜び・・・



「そりゃ僕だって、勉強や野球の練習は嫌いですよ。誰だってそうじゃないですか。つらいし、大抵はつまらないことの繰り返し。でも、僕は子どものころから目標を持って努力するのが好きなんです。だってその努力が結果として出るのは、うれしいじゃないですか」

野球界で数々の偉業を成し遂げたイチロー選手の

言葉です。その結果の裏には様々な葛藤や挫折があったにちがいません。でもそこでくじけずに前に進めたのは「努力すれば必ず結果がついてくる」と自分を信じて努力を続ける強い意志と周囲の人たちの励ましや賞賛があったからではないでしょうか。

また、イチロー選手は「キライなことをやれと言われてやれる能力は後で必ず生きてきます」とも言っています。

私たち大人や教師は、時には厳しく、今やるべきことを子どもに伝えて、やらせることも必要です。でもそれを前向きに取り組もうとする気持ちや意欲が子ども本人になれば、成果はあまり望めません。しっかりした目標を持たせ、今より良くなるかもしれない、できるようになるかもしれないといったプラスのイメージをもたせる必要があります。キライなことから逃げずに立ち向かおうとする姿勢は、がんばったことや努力したことを結果だけではなく、そこに至るまでの過程も含めて私たちがしっかり認めてあげて、努力を褒めて、自信をつけさせることで育つのではないのでしょうか。そのようなかわりによって、子どもは、物事を前向きにとらえ、例え結果が失敗に終わったとしてもそれを克服し失敗から学ぼうとする心が育つのではないかと思います。そして、いつか努力が実り結果が出た時は、より大きな喜びにつながることでしょう。イチロー選手のように目標を持って努力することのすばらしさや喜びを感じることができる子どもを育てたいものです。

赤い羽根共同募金



先日、後期児童会三役の活動の一つとして、赤い羽根共同募金が行われました。

三役の子ども達は、いつもより早く登校して準備をしました。そして、元気よく「よろしくお願ひします」と呼びかけながら募金活動を行いました。

集まったお金は、室蘭市共同募金委員会（室蘭市社会福祉協議会内）を通して、地域の福祉団体や施設に助成され役立てられています。保護者の皆様におかれましては、募金活動へのご理解とご協力ありがとうございました。

今年度本校は、「児童・生徒のボランティア活動普及事業」協力の指定を受け、赤い羽根共同募金を財源とする助成金が交付されました。想合（総合的な学習の時間）の福祉の学習や児童会活動などで使わせていただき活動の充実が図られています。



遊びのひろば 2年

1年生をひろばに招待して楽しんでもらうことを目標に、2年生は、生活科で「遊びのひろば」をつくりました。自分たちで工夫しておもちゃを作り、どうしたら1年生に喜んでもらえるかを考えながら遊び方のルールを決めたりして準備を進めてきました。

1年生が遊びに来た先週の金曜日は、2年生が店員さんになり1年生にわかるようにルールや遊び方を説明したり

遊んだ記念に

景品を渡したりして、お兄さんお姉さんぶりを発揮していました。

1年生は、先輩の言うことをよく聞いて楽しんでいました。「楽しかった」という感想がたくさん聞こえてきました。私も招待され遊ばせてもらいました。ルール説明やおもてなし、とっても上手で感心しました。

学芸会練習・本格化

体育館や音楽室などを使う学年が特別に割り当たる学芸会の特別日課が今週からスタートしました。

今年は、コロナ禍により運動会同様いつもと違った形での開催となりますが、子ども達は、自分たちが頑張った成果を見てもらいたいという思いで、一生懸命練習に励んでいます。

今年は、大きな声を出す劇は練習も含めてリスクが伴うことから、全学年が歌や器楽合奏、ダンスの発表となります。子ども達は、休み時間も自主的に空き教室などで練習し頑張っています。

保護者の皆様には、当日の観覧等でご面倒をおかけしますが、別紙にてご確認の上ご来校ください。

家読週間・ご協力ありがとうございました

先月行われた「家読週間」の取組み対するご協力ありがとうございました。この機会にたくさんの子供たちが、読書に親しんでくれました。これをきっかけに更に本好きの子供たちがたくさん増えることを期待しています。ご家庭でも引き続き読書への働きかけをお願いいたします。



静かな虐待

「静かな虐待」…あまり聞いたことのない言葉だと思います。児童虐待は、犯罪であり心理的、身体的な苦痛を子どもに与えるものですが、この言葉は、親が虐待と気づかずに虐待に近い状況に子どもを追い詰めてしまうという意味で、大阪大学大学院教授の小野田政利先生が、ある教育誌で使っていました。

具体的には、親が、子どもの問いかけや行ないに関心を払わず、スマホの画面を見続けるというものです。ながらスマホ、食事中的スマホなど親が子どもに関心を示さず、子どもへ本来注ぐべき愛情が、スマホ依存によって減ってしまうことが虐待だと小野田先生は、指摘しています。

『愛着障害』という病名があります。親が子どもに注ぐ愛情は、幼少期から少年期にかけて、絶対に必要なものですが、それが子どもに万度に与えられずに育てられたことにより生じる障害です。「突然キレる」「落ち着きがない」「語彙が少ない」「暴力行為」「破壊行為」「大人への不信」などといった行動が表れます。

子どもの言葉に耳を傾け、親身に応えるといった本来あたりまえにあるべき子どもとの関わりは、子どもが親の愛情を感じるの一つですがスマホ依存によりそれが薄れ

『愛着障害』予備軍の子が増えてきているのではないかという警鐘を「静かな虐待」という言葉は、鳴らしています。

